

---

# **本の虫～7月の図書館～**

\*姫林檎\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

本の虫～7月の図書館～

### 【Zコード】

N5429C

### 【作者名】

\*姫林檎\*

### 【あらすじ】

本の虫シリーズです。カレンダーをめくり、近藤君を思い出す私は友達のよっちゃんののろけ話を聞いて、保健室へ逃げ込んだ・・・。

遂に、カレンダーをめくる日がきた。

高校生になつて約3ヶ月目。

近藤君と出合つて約3ヶ月目。

高校にも慣れて1、2ヶ月目。

図書室に行かなくなつて約1ヶ月目。

そつ

近藤君と口をきかなくなつて 約1ヶ月目だ。

「春ちゃん? なんで暗い顔してるので?」

休憩時間、ぼーっと窓の外を眺める私の肩をよしちゃんがたたいた。

よしちゃんは好きな人と両思いになつたらしく、最近つきあいが悪くなつたと女友達に陰口をたたかれていた。

だけど私はその中に入らなかつた。

つきあいがどひのひのりも、私自身近藤君と知り合つてよしちゃんといふ時間が減るだろつと思つていたから。

だから一緒にいる時間が減ったのをよつちやんのせいだけにはできなかつたんだ。

「 セウコウヨウチヤンは元氣だね。」

「 うんーあのねーのろけてもいい?」

「 へへへ いいよ。聞いてあげる」

よつちやんは本当に嬉しそうに金沢君の話をした。

私だってあんなことにならなければ今頃よつちやんに近藤君の話ををしてただろうな。

図書室にいるオレンジな香りの近藤君。

本を図書室に置いていて、私はその本を1ヶ月も借りていた。

その本に書かれた主人公が片思いをする女の子は実在していて、近藤君の大事な人。

私は嫉妬したんだ。

どうしてだろう?

今でも胸が痛むんだ。

こんな想い 本を読んでる時はしないのに。

「 ねえ、聞いてる?」

「あつ・・・じ、じめん 私・・・なんか気分悪いから、保健室行  
くね」

私はよつちゃんの返事も聞かず、保健室へと逃げ込んだ。

保健室の先生は簡単に私をベッドに寝かさせてくれた。

仮病だと気づいただろ？ 気づかなかつたのだろうか？

うとうとしていると、大声が聞こえた。

「先生ー！ 急患ですよーー！」

男子の大声。

そつとベッドから起き上がり、カーテンの間から向こう側を見る。

そこには汗だくの男子生徒が何人かいだ。

ああ、上級生だ。

そつ思い、ベッドに戻るつとした瞬間。

近藤君が見えた。

確かに近藤君がそこにいた。

「あーあ 元気な血液流して。」

先生が笑いながら言つと、ビット笑いが起きた。

近藤君も笑つてた。

近藤君には近藤君の世界があつて、私には私の世界があつた。

今はその世界が、カーテンで仕切られていた。

だけどあの時 私が図書室に行つたとき、この仕切りが一瞬なくなつただけ。

ただそれだけだつた。

近藤君の世界の中には私じゃなくて、大事な誰かが存在していた。

それは私の知らない人。

ただそれだけのはずなのに。

どうして苦しくなるんだろう?

こんなの知らない

こんなの自分じゃどうしたらいいかわからない

「お前を一体育の時間にぼーっとしてるから」けるんだよー。」

上級生の誰かが近藤君に向かつて言った。

近藤君は足に怪我をしていて、真っ赤な血を流していた。

「お前この『じゅわっと』上の空じゃない? 何かあったのか?」

「あ、テストの点悪かったんだ!」

また笑いが起きる。

だけど近藤君は笑つてなかつた。

「違ひよ・・・」

「えー? じゃあなんだよ!」

「・・・わかんないんだよ

「は?」

「何なのかわかんないんだ。ケンカ・・・なんか・・・よくわから  
ない」

「はあ?」

複数のまぬけな声。

近藤君は眉間にしわを寄せた。

「下級生で、ちょっと・・・その・・・特別な子がいるんだ。その

子が・・・なんかこの頃無視するんだ。<sup>シカド</sup>なんでだかわからないんだ。

「

「へえ? なんて名前だよ?」

「ええと・・・小川さん」

「あら」

保健室の先生が私のほうを見た気がした。

だけど私にはそんなことどうでもよくなっていた。

『特別な子がいる』

その言葉が木靈していた。

『大切な人』じゃない。

だけど『特別な子』なんだ。

どうしてだろう 憎く嬉しい。

近藤君の世界に、私は存在していたんだ。

どうしよう 嬉しい。

「何? 先生。こっちに誰かいるの?」

誰か来る！

そう思つた時にはもう遅かった。

カーテンが開いて、上級生の男の子が顔を出した。

その向こうで、私に気がついて顔を真っ赤にする近藤君がいた。

梅雨も明けて、桜の葉の間から光が差し込む 少し暑い7月のことでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5429c/>

本の虫～7月の図書館～

2010年10月17日04時51分発行